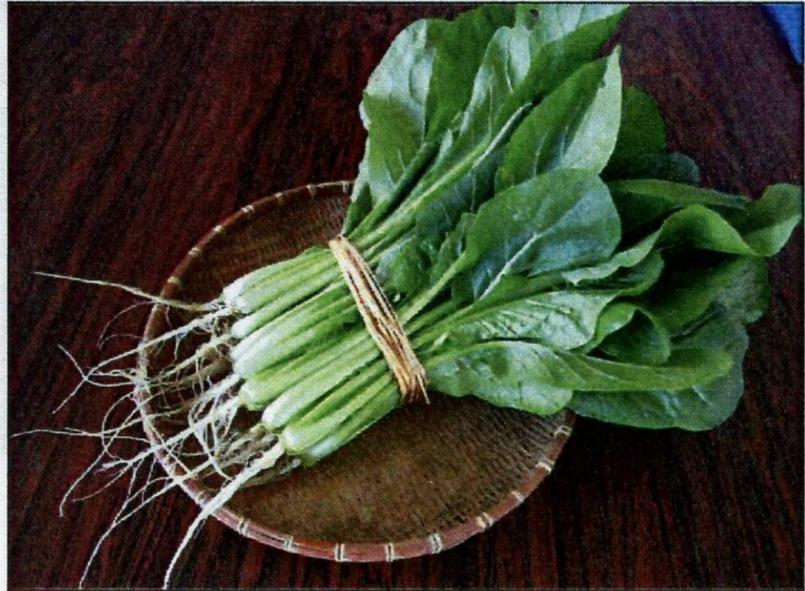


ごせき晩生小松菜

小松菜発祥の地である江戸川区の後関種苗が、昭和25年より集団選抜を続け昭和38年に「ごせき晩生」と命名し、市販を開始した固定種。現在流通しているF₁品種と比べると、葉は淡い緑色で袴が多い有袴型である。低温伸長性が高いため低温期の栽培に向いている。また、抽苔が遅い晩抽性品種であるため春先収穫にも適する。



1. 作型

コマツナの歴史は江戸時代までさかのぼり、当時は冬菜として秋冬期に限定して栽培されていた。「ごせき晩生」もそれらのコマツナと同様に低温期向きの品種であり、特性を発揮するのは露地栽培では10月播種～4月播種、ハウス栽培では11月播種～2月播種である(表9)。それ以外の播種時期でも栽培自体は可能だが、低温期と比べると徒長してしまい葉枚数が確保されず、収量は現行品種に大きく劣る。したがって、旬を楽しむコマツナとして作付することが推奨される。

露地栽培では冬季の播種は低温と乾燥で発芽や生育が不良となることがあるため、保温資材によるトンネル被覆およびべたがけを活用する。ただし、1～2月頃の厳寒期にべたがけを行うと凍害の危険があるためトンネル被覆を行う。

表9 「ごせき晩生」の作型(江戸川)

作型 \ 月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
露地栽培			○	—	■					○	—	■	
施設栽培	○	—	■								○	—	■

○:播種 ■:収穫 〰:トンネル開始 〵:トンネル終了 〰:防虫ネット開始 〵:防虫ネット終了

2. 施肥管理

施肥量は他のコマツナ品種と同等で良い。コマツナは生育期間が短いため、全量基肥を基本とする。生育期間の長い低温期は有機質肥料を主体とすると良い（表10）。

施設栽培では降雨による窒素の流亡がほとんど無く、塩類集積が起きやすい。したがって、土壌診断を定期的に行い、圃場のEC等を確認の上、施肥量を加減する。また、リン酸が不足する圃場の場合は堆肥の施用と併せて、重焼燐等のリン酸質肥料を施用すると良い。

表10 「ごせき晩生」の施肥例(10aあたり)

	肥料・資材名	施用量 (kg)	成分量(kg)		
			窒素	リン酸	カリ
露地栽培	牛糞堆肥	2000			
	炭酸苦土石灰	100			
	有機ペレット(7-5-5)	200	14	10	10
	合計		14	10	10
施設栽培	牛糞堆肥	2000			
	炭酸苦土石灰	100			
	有機ペレット(7-5-5)	100	7	5	5
	合計		7	5	5

備考

- ①土壌診断の結果、Pが少ない場合は、堆肥とともにリン酸質肥料を加える。
- ②高温期は化成肥料のみでの作付も可能。軟弱徒長を防ぐため2割程度減肥する。
- ③石灰は、pH5.5～6.5となるように調整する。

3. 栽培管理

(1) 播種

(施設栽培)

畝は平畝で畝幅は120～160 cm、通路を20～25 cmとする。

播種は、播種機を利用し条間12～15 cm、株間3～7 cmで行う。高温期は軟弱徒長を防ぐために株間を広めにし、低温期は狭めると良い。播種後は灌水チューブを地面や頭上に設置し、直ちにたっぷりと均一に灌水する。

(露地栽培)

施設栽培に準ずる。ただし、ベッド幅はトンネル幅に合わせて決める。

(2) 播種後管理

(施設栽培)

乾燥時は適宜灌水を行う。乾燥はカップングの助長、生育の遅れ・不揃い等の原因となるため注意が必要である。ただし、収穫間際に灌水してしまうと収穫時に葉柄が非常に折れやすくなるため、灌水は圃場が適度に乾燥するよう収穫7～10日前までを目安とする。

(露地栽培)

低温期以外では防虫ネット(0.8 mm目合)を展張し、低温期は農PO等の保温資材をトン

ネル被覆する。極端に乾燥する場合は灌水チューブ等で灌水する。

また、冬～早春に鳥による食害が発生する場合があるため、保温資材を使わない場合でも不織布等のトンネル被覆を検討する。1～2月頃の厳寒期にべたがけを行うと凍害が発生する危険があるため、注意が必要である。

4. 収穫・調整

「ごせき晩生」は近年の F₁ 品種と比べると開帳性で葉が開きやすいため、収穫の際は茎が折れないように注意する。下葉が開張しやすいため、販売の際は出荷できる程度に開張した下葉は除去すると良い（図 34、35）。

また、棚持ちを良くするために、収穫後はなるべく早く水洗いを行うことが必要である。洗浄とともに保冷庫で 10℃程度の予冷を行う。

収量は低温期で 1.5～2.0 t/ 10 a 程度期待できる。高温期は収量が半分程度となる。



図 34 「いなむら」(左)と「ごせき晩生」(右)の葉色の違い

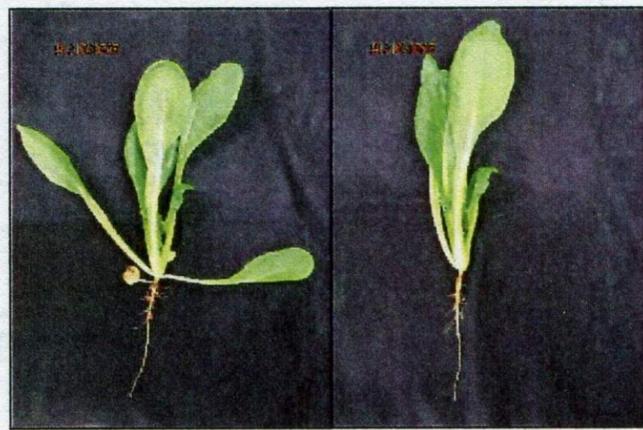


図 35 調整前(左)と調整後(右)

草丈 25 cm 以上で抜取り収穫を行う。ただし、特に低温期以外は現行の F₁ 品種と比べると重量が出にくいいため、販売等に影響が出ない範囲で大きくして収穫することで収量を確保できる。

また、低温期以外の時期には、気温の低い時間帯に収穫することで、品質を保持することが重要である。

5. 病虫害防除

害虫ではキスジノミハムシ、コナガ、ハイマダラノメイガ、アザミウマ等が、病害では白さび病、リゾクトニア病がみられる。防虫ネット(0.8 mm 目合)の展張等の耕種的防除と土壌消毒、薬剤散布等の化学的防除を組み合わせる防除を行う。

施設栽培の場合、被覆資材として UV カットフィルムを使用し、サイド、妻面上部等の開口部には防虫ネットを展張することで、農薬散布回数を削減することができる。また、圃場には調整葉や病虫害の被害株を放置せずに、ただちに圃場外に持ち出すことが重要である。